

令和元年12月7日(土)午後1時30分

たげきたばたけし こんこくじあと
多気北畠氏遺跡第38次(金国寺跡第2次)
発掘調査現地説明会資料

事業名：多気北畠氏遺跡発掘調査 調査原因：学術調査
調査主体：津市教育委員会 調査地：津市美杉町下多気
調査面積：174m² 調査期間：令和元年10月7日～12月27日（予定）
調査指導：多気北畠氏遺跡調査指導委員会
三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター

1. はじめに(資料①)

多気北畠氏遺跡は、津市美杉町上多気・下多気に所在する北畠氏に関連する城館跡や寺院跡などの遺跡の総称です。津市教育委員会では、多気北畠氏遺跡の発掘調査を継続して実施しています。金国寺跡は、北畠具方(材親)^{ともかた きちか}の菩提寺と考えられている寺院で、平成28年度から平成30年度まで地形測量調査を行い、平成30年度から発掘調査を実施しています。

今回の発掘調査は、平成30年度に続いて金国寺跡のほぼ中央の平坦地部分(中段)、その北側にある斜面と上段に調査区を5か所(第1～第5調査区)設けて、金国寺跡における遺構や遺物の分布状況を確認するため実施しました。

2. 現況(資料②)

金国寺跡は八手俣川左岸の丘陵に所在し、その規模は、南北約150m、東西約130mで、南部の平坦地から北奥部までの高低差が約30mあります。現況は南側の平坦地が耕作地で、北側と谷の東側が山林です。中央にある上・中・下3段の平坦地が寺院の中心と考えられ、平坦地の間の斜面には石材が点在しています。また、金国寺跡や周辺で見つかった中世から近世にかけての五輪塔や無縫塔^{むほうとう}(僧侶の墓石)などの石材が2か所(石造物群A・B)に集められています。

3. 基本層位

調査地の現況は山林ですが、昭和40年代頃までは耕作地として利用されました。平坦地では、旧耕作土の直下においてほぼ平坦な地山(淡黄色砂質土層など)と整地土(暗褐色土)を検出しました。これらを基盤層として、石積

や石列、土坑などの遺構を確認しました。

4. 発見された主な遺構(資料③、④～⑧)

- ・ **円形土坑**(資料④) 第1調査区の東端で検出された直径約1.2m、深さ約50cmの円形の土坑。近世の陶器が出土しました。
- ・ **礫群 1**(資料⑤) 第2調査区の南端で検出された南北の幅が約1.3mの礫群。16世紀前半の遺物を含む整地土の上に大きさ約20～70cmの石材が集められています。
- ・ **礫群 2**(資料⑥) 第3調査区の東端で検出された東西幅が約1.3mの礫群。礫群は大きさ約30～60cmの石材からなり、掘方からは16世紀前半の土師器が出土しました。
- ・ **石積**(資料⑦) 第4調査区の中央部の斜面で検出された東西の方向に延びる石積。残存する2段の高さは約90cmで、石材は約80～90cmの大きさです。この石積は、昨年度の調査で確認された2列の石積のうち、後列の石積に続くものと考えられます。石積の北側の整地土からは16世紀前半の遺物が出土していることから、16世紀前半の整地に伴い造られたものと考えられます。
- ・ **石列 1**(資料⑦) 第4調査区の北端で検出された東西方向に延びる石列。大きさ約30cmの石材の平らな面を南側に向け、調査区のさらに東西方向に続くと考えられます。南側の石積より早い時期に造られたものですが、掘方からの遺物の出土はなく、いつ頃のものが明確になっていません。
- ・ **礎石**(資料⑧) 第5調査区の北端近くで検出された大きさ約30cmの上面が平らな石材で、礎石と考えられますが、これと一体となる他の礎石は確認できていません。
- ・ **石列2**(資料⑧) 第5調査区の北端で確認された東西方向の石列。南側に面を持つ大きさ約50～80cmの石材で、北側の斜面の裾に位置することから、区画や土留めの機能などが想定されます。

5. 発見された主な遺物

遺物は整理箱に14箱出土しました。その大半は表土直下の遺物包含層のほか、整地土、遺構埋土などから出土しました。古いものでは、第2調査区の整地土からは13世紀の土師器や山茶碗、瓦器碗の破片が出土しました。

遺物の多くは土師器と呼ばれる素焼き^{はじき}の皿や陶器で、16世紀前半のものが多

く、土師器については地元産のいわゆる南伊勢系土師器と呼ばれるものです。陶磁器類では、16世紀前半の瀬戸美濃産の天目茶碗や播鉢、常滑産の甕や鉢、中国産の青磁・白磁・染付などがあります。そのほか少量の鉄釘も出土しました。表土や遺物包含層からは近世以降、近現代の陶磁器も出土し、特に上段からは近世以降の遺物の出土が目立ちました。

6. まとめ

今回の調査の結果、上・中段の平坦面は、地山を削り出したり、低くなっている部分を盛土することによって造られており、出土した土器から16世紀前半以降に使用されていることが判りました。

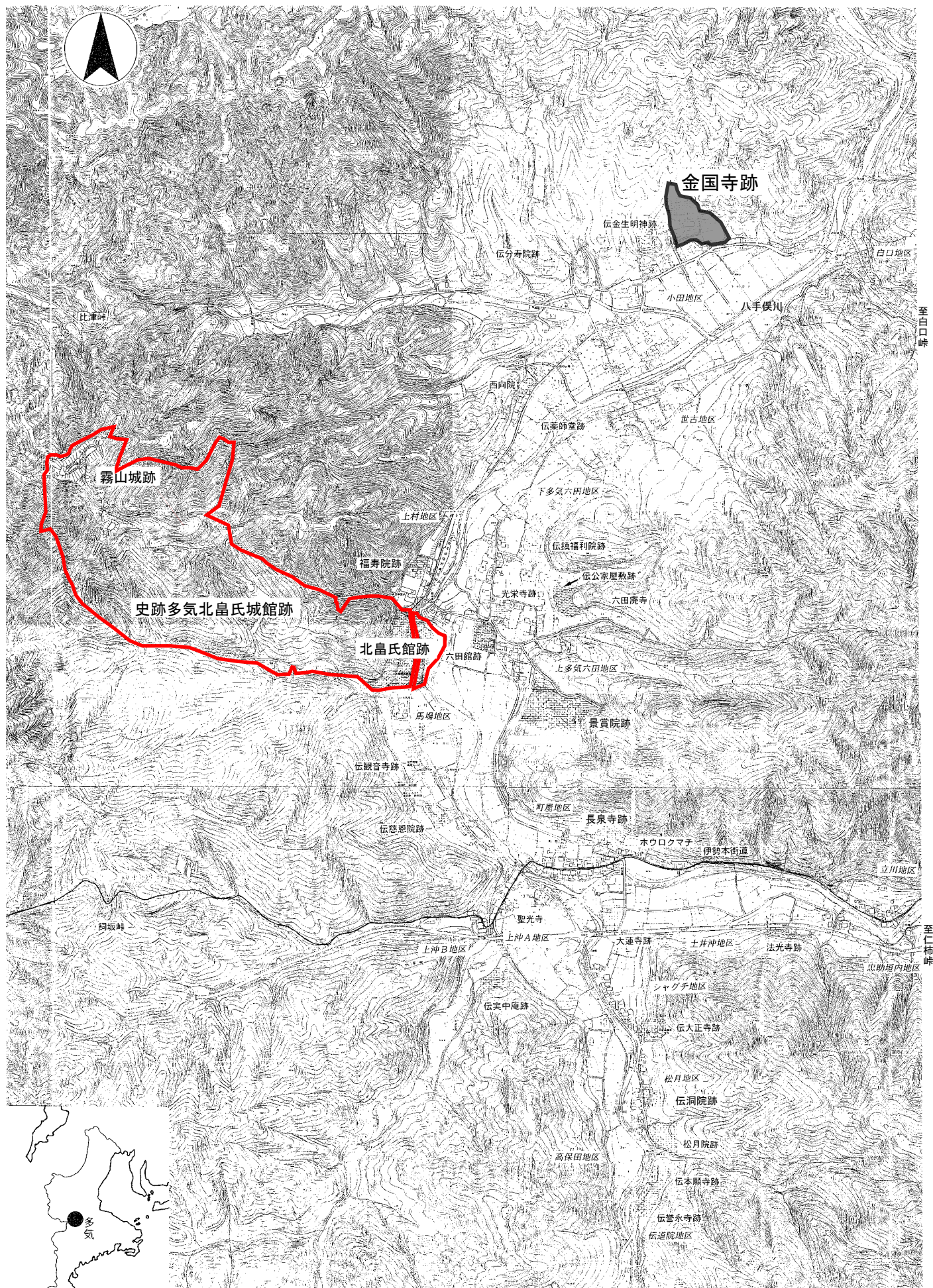
遺跡の範囲を確認するためのトレンチ調査であるため、礎石と推察される石材やピット等は検出されているものの、建物跡については明確ではありません。しかし、各調査区からは中国から輸入された磁器類や、複数の天目茶碗などが出土しており、これらは格の高い人物が使用する品々であることから、金国寺跡と北畠氏の関係を示唆するものと考えられます。

今回の調査地は、16世紀後半に北畠氏が滅亡した後も、江戸時代後期まで寺院として堂宇が存在したことが知られています。その後、上・中段の平坦面は、耕作地、山林へと姿を変えていきますが、旧耕作土の直下では造成されたかつての平坦面や区画の石積や石列などが良好に残っていることが判りました。

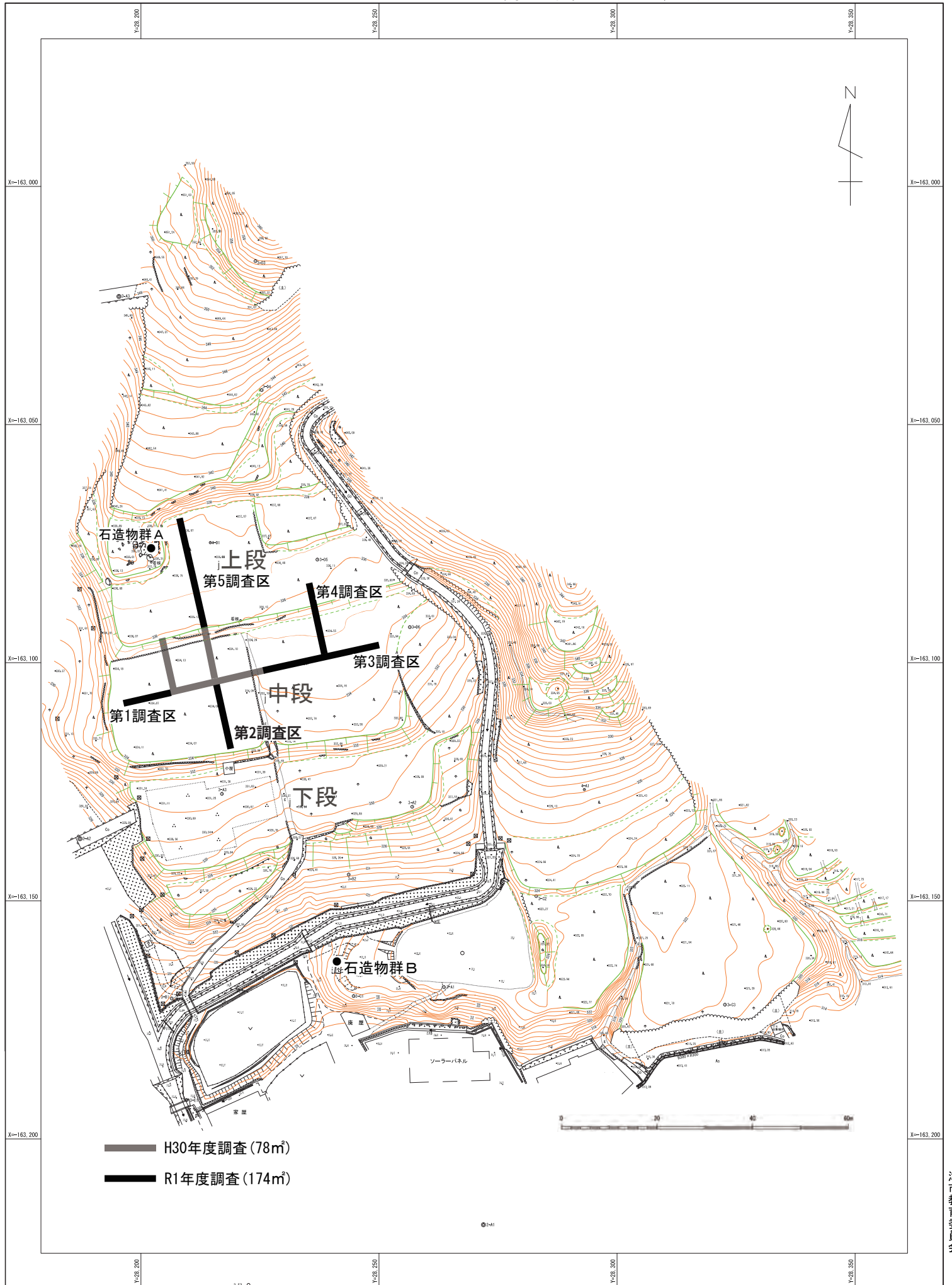
今後も引き続き金国寺跡の構造解明にむけた調査を行っていく予定です。

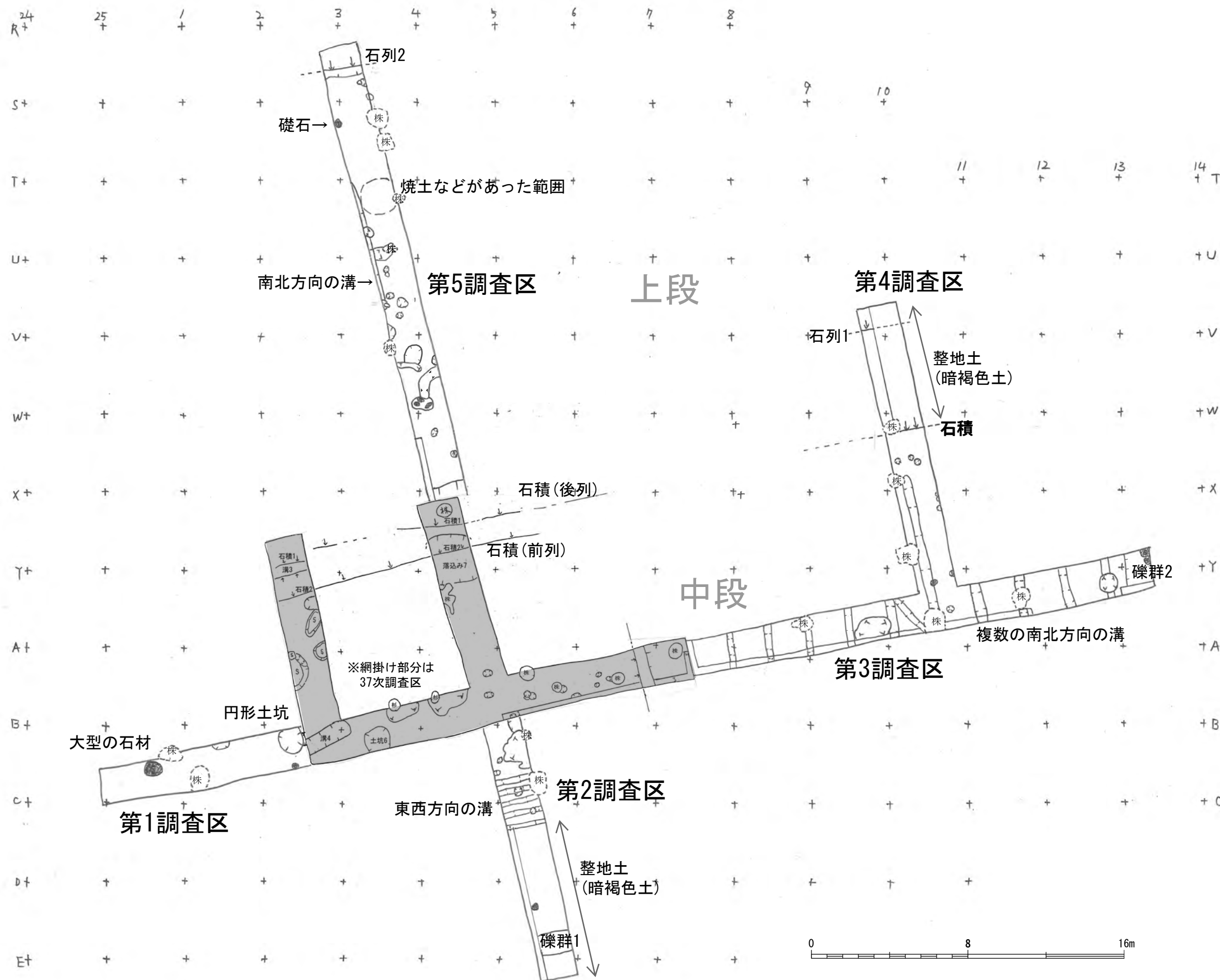
【資料】

- ① 多気北畠氏遺跡(金国寺跡)位置図 (1:15,000)
- ② 多気北畠氏遺跡(金国寺跡)調査区位置図 (1:1,000)
- ③ 多気北畠氏遺跡第38次(金国寺跡第2次)発掘調査略則図 (1:100)
- ④～⑧ 調査区写真
- ⑨ 北畠氏・多気関連年表



多気北畠氏遺跡(金国寺跡)位置図(1:15,000)





資料④



第1調査区全景 東から



円形土坑



大型の石材

資料⑤



第2調査区全景 北から



調査区南端の礫群 1



東西方向の溝群

資料⑥



第3調査区全景 西から



調査区東端の礫群2



南北方向の溝 北壁

資料⑦



第4調査区調査区全景 南から



上・下段を区画する石積



下層の石列1

資料⑧



第 5 調査区全景



調査区北端の石列 2



礎石と推察される石材

北畠氏・多気関連年表

西暦	元号	当主	出来事	発掘の成果
1336	延元元 建武3		北畠親房、伊勢入国。田丸城を拠点とする。	
1342	康永元	顕能	8月、田丸城落城。（『波多野貞夫氏所蔵文書』）	
1392	明德3		南北朝合一	
1403	応永10	顕泰	満雅への家督譲渡はこの頃と考えられる。（『醍醐寺文書』）	
1415	応永22	満雅	北畠満雅、幕府に対して挙兵。幕府軍の勝利に終わり、満雅は幕府と和議。（『満濟准后日記』）	
1428	正長元		後亀山天皇の孫小倉宮、伊勢国に出奔。「国司在所多気」の奥、「興津」に入る。（『満濟准后日記』） 満雅再び挙兵。（『満濟准后日記』） 12月に戦死する。（『師郷記』等）	
1430	永享2	顕雅	満雅の弟顕雅、満濟、赤松満祐の仲介により将軍足利義教と対面。（『満濟准后日記』）	
		教具	教具、叔父顕雅より家督を継ぐ。（『満濟准后日記』『建内記』）	
1441	嘉吉元		赤松満祐、将軍足利義教を殺害（嘉吉の乱）。赤松氏滅亡、満祐の子教康は伊勢国司を頼るが、これを匿わず、誅殺する。（『建内記』）	↑ 北畠氏館跡前期 石垣SA25・28、入口跡を造営
1453	享徳2		この頃、本格的な神三郡支配に乗り出す。（『氏経卿引付』）	↓
1467	応仁元		応仁の乱。将軍足利義政の弟義視、応仁の乱時に伊勢に下向、小倭の常光寺で国司教具と対面。（『応仁記』）	
1471	文明3	政勝	北畠政勝、父教具の死去により家督を継ぐ。（『内宮引付』『大乘院寺社雑事記』など）	
1480	文明12		北伊勢で長野氏と合戦するが、大敗。（『大乘院寺社雑事記』『氏経神事記』）	
1497	明応6	具方	木造政宗が北畠帥茂（具方の異母弟）と結び反乱。（『大乘院寺社雑事記』『大乘院日記目録』）	
1499	明応8	（材親）	北畠氏の多気館ことごとく焼失する。（『大乘院寺社雑事記』）	北畠氏館跡後期整地この後か六田館跡初期の整地
1500	明応9		多気館再建。（『大乘院寺社雑事記』）	北畠氏館跡後期
1517	永正14	晴具	父具方の死により国司家を継ぐ。 北畠氏館跡庭園は、この頃造られたと伝えられる。	↓
1537	天文6	具教	この頃具教家督を継ぐ。この頃領域を拡大するが、永禄に入り、領域内志摩、宇陀での軍事的緊張高まる。（『澤氏古文書』など）	↑ 上多気六田地区4・5次
1562	永禄5	具房	この頃北畠具房家督を継ぐ。（『浄眼寺文書』）	↓
1569	永禄12	（具雄豊）	織田信長南伊勢に侵攻、天花寺城・阿坂城・大河内城にて北畠具教と戦う。信長の次男茶筌丸（北畠具豊、信雄）を北畠氏の養子とし、和睦。（『信長公記』『多聞院日記』）	
1576	天正4		具教、信長により殺害され、北畠氏滅亡。多気も滅亡か。（『公卿補任』『勢州軍記』など）	